



12月になります。共通テストまであと50日を切りました。3年生の皆さん、体調に気をつけて、悔いのないように、できる限りがんばっていきましょう！

さて、3年生はもはや理解しているとは思いますが、1・2年生、保護者の皆さんも、大学入試の仕組みを確認しておきませんか。とても大切なことです。

改めて大学入試（主に国公立大学）について確認しよう

河合塾HP参照

大学入試には、一般選抜、学校推薦型選抜、総合型選抜があります。学校推薦型選抜と総合型選抜は、その試験の多くが11月までに終了し、結果が12月に発表されます。挑戦した3年生は、一般選抜の勉強と合わせて小論文や面接などにも取り組み、準備してきました。こうした学校推薦型選抜や総合型選抜の募集人員枠は近年拡大していますが、依然として一般選抜の募集人員枠が全体の約8割を占めています。

共通テストと2次試験（個別学力検査）

国公立大学の一般選抜は、1次試験的役割を果たす「共通テスト」の得点と、大学別に実施される「2次試験（個別学力検査）」の得点の合計で合否を判定するケースが一般的です。国公立大学志望者は、1月中旬に実施される「共通テスト」を原則受験しなければなりません。自己採点を行った後、志望する大学に願書を提出します。注意したいのが国公立大学の出願期間です。国公立大学の出願期間は、共通テストの約1週間後からスタートし、約10日間となっています。思うように得点できなかった場合は、当初考えていた出願校を変更しなければならなくなることもあります。出願時になって慌てないよう事前に複数の候補を挙げておき、願書を取り寄せておきましょう。3年生の皆さんは、すでに受験する予定の大学の願書を取り寄せているでしょうか。



「分離・分割方式」とは？

各大学で実施される2次試験（個別学力検査）は2月下旬から行われます。2次試験は「前期日程」「後期日程」の2つの日程に募集人員を振り分けて選抜する「分離・分割方式」という制度で実施されます。受験生は「前期日程」と「後期日程」にそれぞれ1校ずつ出願できます。同じ大学・学部を2回受験することも、別々の大学・学部を受験することもできます。また、一部の公立大学では「中期日程」を設定する大学もあります。これらをあわせると国公立大学は最大3校の受験が可能となります。注意しなければならないのは、「前期日程」で合格して入学の手続きを行うと「中期日程」「後期日程」を受験していても、合格の権利を失ってしまうということです。そのため、第1志望校は「前期日程」で受験するのがセオリーとなっています。

出願しても2次試験を受けられない？～2段階選抜～

国公立大学の一般選抜でもう1つ気をつけなければならないのが2段階選抜という制度です。これは共通テストの成績を用いて2次試験の受験者を事前に選抜したうえで（これを第1段階選抜といいます）、2次試験を実施する制度です。実際に2段階選抜が実施されるのは、志願者が集まる難関大学や医学科が多くなっています。2段階選抜の実施を予定している大学では、共通テストの成績次第で2次試験を受けることなく不合格となる場合もあります。国公立大学志望者は、まず共通テストでしっかりと得点できる力をつけることが大事です。

裏に続く

共通テストは7科目以上の受験が基本

入試科目は共通テスト・2次試験(個別学力検査)とも大学により異なります。2023年度入試では、多くの国公立大学が共通テストで7科目を課していました。国公立大学だけに絞ると、7科目以上を課す大学は88%にのびりました。この7科目以上の構成も大学により異なりますが、大別すると次の3つのパターンに分けられます(文型理科は2科目セットで1科目とカウントします)。

(文型) 外・国・地公2必須、数・理から3(数2必須パターンを含む)

(理型) 外・数2・国・理2・地公

(選択型) 外・国必須、数・理・地公から5(数2必須パターンを含む)

学部系統別に教科パターンをみていくと、文系学部では地歴公民2科目が必須の文型、理系学部では理科2科目が必須の理型が一般的となっています。国公立大学でも少数派ながら少ない教科・科目数で受験できる大学はあります。しかし、受験科目を絞れば負担が減るかわりに、志望校の選択幅がぐっと狭まります。

2次試験科目は日程によって傾向が異なる

2次試験の入試科目も共通テスト同様に大学によって異なります。前期日程の入試科目は、一般的には文系学部で「外国語、数学、国語、地歴・公民」から2～3教科、理系学部では「外国語、数学、理科」から2～3教科が課されます。ただし、東京大学、一橋大学、名古屋大学、京都大学など一部の難関大学では4教科を課す学部・学科もあります。

一方、後期日程では前期日程に比べ教科数を1～2教科に減らすケースや、総合問題、小論文や面接などを課すところも多くなっています。なかには、2次試験を行わず共通テストの得点のみで合否を決定する大学もあります。配点についても共通テスト、2次試験ともに大学ごとに設定されています。よく見られるのは専攻する学問に関連する教科の配点を高くするパターンで、例えば理系学部では数学や理科の配点が高くなっているケースが目立ちます。また、共通テストと2次試験の配点比率も大学によってかなりの差があります。

確認しておこう！リスニングの配点に注意！

外国語の「英語」の受験者は、「リーディング(センター試験時の「筆記」から改称)」と別時間に実施される「リスニング」の受験が必須となっています。「リーディング」と「リスニング」の配点はそれぞれ100点で、配点比率は1:1となっています。ただし、各大学が成績を利用する際には、配点比率を自由に決めることができるため、そのまま1:1で利用する大学のほか、センター試験時と同じ4:1で利用する大学もあるなど、大学により対応は分かれています。以下にその配点比の例を挙げておきます。(R=リーディング、L=リスニング)

・青森県立保健大学 R4:L1 ・弘前大学 R1・L1 ・東北大学 R3:L1 など *前期日程です。

来年度(2025年1月、現2年生が受験)共通テストの出題科目が変わります！

2022年度4月に学習指導要領が改訂され、新しい教育課程(カリキュラム)で各教科・科目が構成されました。ちなみに「学習指導要領」とは、文部科学省が学校教育法に基づき、各学校で教育課程を編成する際の基準を定めたものです。日本の学習指導要領は、時代の変化を見据えて概ね10年ごとに改訂されており、今回の学習指導要領では、**生きて働く「知識・技能」の習得、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力」の育成、学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養**、が三つの柱となっています。この改訂による新課程に則り、2年生・1年生は学習をしています。

この改訂によって、来年度から大学入学共通テストの出題教科・科目も変わります。今までと大きく異なるのは、「情報」が含まれることです。国公立大学は原則6教科(外国語・数学・国語・情報・理科・地歴公民)8科目を受験する必要があります。文系学部では、外国語・数学2科目・国語・情報・理科基礎2科目・地歴公民2科目、理系学部では外国語から情報までは文系科目と同じで、理科2科目と地歴公民1科目の受験が求められます。教育学部や文理融合型の学部などでは、文系理系両方のパターンで受験できるケースがあったり、難関大では「地理総合・歴史総合・公共」が選択科目として認められていなかったりします。自分の志望する大学・学部を受験するために必要な教科・科目を把握することが必要です。